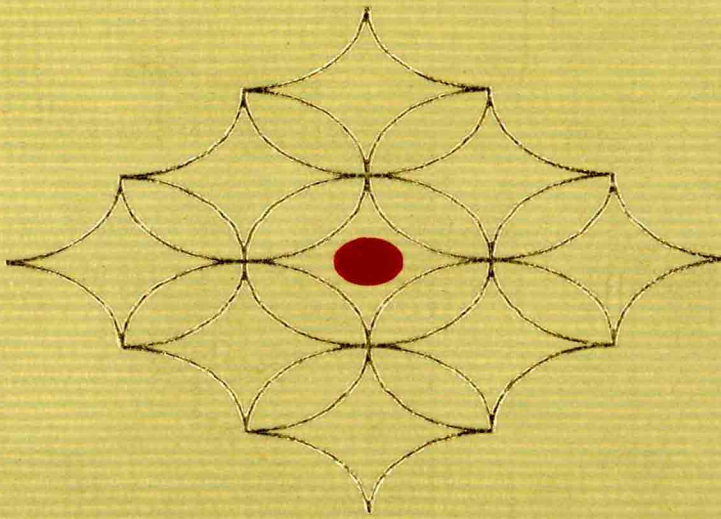

現代日本文學大系

53

大佛次郎
岸田國士 集
岩田豐雄

●

筑摩書房

現代日本文學大系　53

昭和四十六年三月十五日　初版第一刷発行
昭和四十八年十月三十日　初版第二刷発行

大佛次郎・岸田国士・岩田豐雄集

著者　大佛次郎　岸田國士　岩田豐雄
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　株式会社　精興社　製本　株式会社　鈴木製本所

(分類) 0393 (製品) 10053 (出版社) 4604

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大佛次郎集　目次

巻頭写真
筆蹟

道化師　三
詩人　二一
地霊　三〇
赤帽のすずき　一六七
スイッチョねこ　一七三

岸田國士集　目次

巻頭写真
筆蹟
古い玩具　一七九
チロルの秋　二〇四
紙風船　二二四
牛山ホテル　二三二
歳月　二四五
女人渇仰　二六八
カライ博士の臨終　二七九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

岩田豐雄集　目次

巻頭写真
筆蹟
東は東　二九五
朝日屋絹物店　三〇六
新劇と私　三一九
〔付録〕
大佛次郎　河上徹太郎　三八三
岸田国士の生涯―その一断面―　中島健藏　三八七

大佛次郎集

人にそれぞれの
道がある

大佛次郎

道化師

夜

歌舞伎座の昼の、あと一幕で打出しと言うところで、時実大輔は客席から立って市川左十郎の部屋を訪ねた。

奈落の廊下を入ると、敷いてあるすのこが靴の下で、ことん、ことん鳴る。いつもながら舞台で使った河内山の駕籠などが投げ出したように片側に置いてある。階段を楽屋に入って行くと、衣裳を着て出を待っていた若手の女形が、時実と見て、床几から立って町娘の可憐な姿形ながら男をまる出しのお辞儀をして

「お早う御座います」

と挨拶する。この社会では夜になっていても人に会うとお早うと言うのが、しきたりである。

「お早う。成田屋の部屋は？」

「いつもの……頭取部屋の前で御座います」

時実大輔は、弁護士だが、家が日本橋で何代も続いた袈裟屋で親の代から歌舞伎が好きだったので、住居の方にも贔負の役者がよく出入りしていた。四十歳になったばかりの大輔を見て、坊ちゃんとか若旦那と呼ぶ者が、歌舞伎座へ来ると、まだ幾たりかいる。一時、司法官をしていたのを罷めて弁護士の看板を出したのが、袈裟屋のお店の坊ちゃんが出世なさったものだと信じられていた。

三枡の紋を染め抜いた暖簾を頭だけくぐらせて

「いる？」

附添っている弟子が

「旦那、先生で御座います」

鏡に向って羽二重をつけた顔から首に白粉を塗った左十郎が振向いて、浴衣の襟を合せながら

「おや、いらっしゃいまし」

その脇に、新橋の人と知れている若い芸者が洋装でいたのが、急いで動いて、席をあけて座布団を出して、大輔の席を作った。

「まだ舞台がある？」

「へえ……ちょっと、つきあいで顔を出すだけですが」

「実はね、ヨーロッパへ行くのだ」

鏡の中の白い顔が、すこしばかり注意をこめた表情を見せて

「へえ、それァ御苦労さまで御座います。で、いつ頃？」

「今夜のエール・フランスに乗る」

「今夜……ですって？」

「八時とかに行ってなけれァいけない」

「そいつは、おいそがしい。そんな、おいそがしい中を御見物くださいましたか？」

有難うございますとは言わないでも、ふくめてある意味が、ちゃんと伝えられる話振りだ。

「ここから、すぐ羽田にいらっしゃる？」

「どこかで飯を喰ってからだ」

大輔は、微笑した。

「芝居といっしょだ。意地きたなく、寿司でもつまもうと考えたところだ。当分、東京のものとはお別れだからな」

「どのくらい、行ってらっしゃるんです？」

「仕事に遊びをかねているので、こっちから呼出しが掛らなければ、季節はいいし、当分骨休みに遊んで来るつもりだ。帰るとなれァ一晩で帰って来られるのだ」

「御免ください。衣裳をつけて了います」

と左十郎は断って、立ち上って壁の方に向き、弟子が後から着せる衣裳に手を通してから、鏡に向った。武家風の衣裳なのは、入谷の寮の金子市之丞のものだ。

「あっちでも、また芝居を御覧になりますか」

「オペラぐらいだな、あいつは、台詞がわからなくとも歌だから。ほんとうの芝居は見てもチンプンカンプンだ。ほかの見物が笑ってるのに、こっちは何が可笑しいのかわからず、ぽかんと取残されているようなのは、自分でも好い恰好とは思えないよ」

「そう言えば、もとの高輪の奥さんのところの、妙子お嬢さんがパリへお出かけになると聞きましたよ」

これも芝居の古い贔負で、故人になったが、いろいろと噂を残した明治の美人の忘れ形身であった。

「ふうん、もう聞いてるのか」

「それァ、どこかから風が持って来て教えてくれますよ。お出かけ前に一度、お目にかかりたいと思ってたんだ。私ァ、あちらがおちいさい時分、お宅へ伺って背負って遊ばせて上げたことなんか、あるんでしてね」

左十郎は、鏡の前に坐って、かつらを附けた。一変して、江戸末期の小旗本の姿に変る。その姿のまま、彼は話すのだ。

「今だったら質の悪い週刊誌がほっときはしません。あの時分でさえ、隠すのに皆で骨を折ったんだから……つまり内の親方と、御贔負のあちらの奥さんとの間に何かあって……あの妙子さんは、ほんとうは親方のものだってんでしてね。こちらは、まだ餓鬼でしたが、忘れられませんや。たしか外交官か文化アタッシェとかと御一緒になって、そちらがパリだか、スペインに行っていらっしゃる。その旦那のところへ、いらっしゃるってわけでしょう」

「そこへ行くには違いないがね」

大輔は、苦笑にまぎらせた。

「実を言うと、今夜、羽田で落合って、一緒の飛行機に乗る。僕のあっちへ行く用事と言うのが、外国の商社関係の仕事もあるが、あの奥さんがその旦那様に離婚の話をしに行くのに介添を仰せつかって附いて行くのだ」

「へえ」

金子市之丞の顔が調子を和せた。

「結婚解消は、当時、はやりもので珍らしくねえようですが、あのお嬢さんだけのひとを気に入らなくなったのは、おかしいな。どこへ押出したって、しゃんとしたものの筈だ」

「おあいにくと、逆さまでね。奥さんの方が厭になった、別れてくれというので」

「へえ」

と、また言う。

時実弁護士は、附加えた。

「そのお婿さんが一中、一高、帝大の出世コース。昔なら、恩賜の銀時計、まちがいなしという秀才なのでね」

「それァ、どっか片輪なんだ」

金子市之丞が、ぬけぬけと言ったので弁護士は苦笑した。

「そこまでは知らないが、とにかく現代の……なんて言うのか、教育ママから見たら、よだれが出るほど頼もしいお婿さんなのだがね。それで、男の方は未練があって、どうしても切れようと言わない」

「でしょう。近頃は知らないが、あれだけのべっぴんは、そう、ざらにお目にかかれるものでない。明治美人のおふくろ様の瓜実顔を、ぐっとモダンにしたのだ。第一、のびのびした姿がいいや。あっしがおぶって遊ばせてやった頃は、ちょうずまでさせてやりましたがね。そうなると、こっちが年をとったと言うわけですか」

「いや」

と、いつの間にか影を消して居なくなっていた若い女客にかけて

「お前さんは、まだ若いよ」

「何も出ませんよ。おや、二丁だ」

弟子が渡した大小の刀を受取って
「幕があくから御免蒙ります。そこまでお送り申しましょう」
奈落へ降りる階段の上まで送って来て
「夜の八時ですか？」
「ああ」
「羽田までお見送り申したいんですが、その時間には、こっちは金閣寺の松永大膳で目玉を剝いているところだ。では、道中御無事、……ボン・ヴォアイヤージュって言うんですか、ついで、妙子お嬢さまにも手前がよろしく申したと仰有ってくださいまし」
「言うよ、では、行って来る。もっとも大詰の舞台は拝見して行くがね」
階段を降りかけて、何か言おうとして振返ると、刀をさげた金子市のそばに、どこから出て来たのか、洋装の彼女がいつの間にか出て並んでいる。美人だが、すこし胴が長いな。洋装はよさせたがいい。弁護士はこの意見を喉もとまで出たまま、もと来た奈落の通路に降りて行った。

晩春の午後七時半は、もうまったくの夜で、空港の巨大な建物の燈火を大きな闇の中にきらめかせていた。えんえんとつながる自動車の尾燈が赤い螢のように見える。
国際線のロビイは乗客や見送りの人々でいっぱいである。何かの商社か団体の見送りで間を通るのが骨が折れるほど廊下を塞いでいた。事務所を手伝っている青年が大輔の荷物を持って先に来ていたのが、ロビイの円形の長椅子から手をあげて合図してくれた。
「まだ三十分あるな」
席を譲ってくれようとする青年を抑えて、ロビイを見廻した。
「おれも遅いと思ったが、鷲尾夫人はまだ来てないのか」
「さっきから気をつけているんですが、まだのようです」
「おそいね。お化粧が長いわけでもなかろう。自動車がおくれるのか。もう、ラッシュでもなかろうが」
大輔は、すこし気になった。自分がおそくなって事務員の中松をやきもきさせていたことなど考えないのだ。鷲尾妙子は、横浜の義兄の家から来るわけで、兄夫婦が運転する車で来る筈なのである。
「さっきの電報を打ってくれたかい？」
「いえ、飛行機が出てからでいいと思って、まだ持ってます。ガスが深くて、予定の時間に飛ばないことがあるようですから」
電報は、パリにいる友人にオルリ空港に迎えに出て貰うように依頼するものであった。
「コペルニック街十九番地。折竹正志、君も覚えといてくれ。向うへ着いてどこのホテルに泊ることになるか知らないが、折竹さんあてに連絡すれば間違いない」
「おそいですね」
「そうだ。おそいね」
どこへ向う旅客機の乗客か、見送りの人々が左右に分れて送る間を順に入って行く。北欧人らしい赤髯の青年が簡単な袋をさげて、三、四人でその中にいるのが、背が高いので、アルペン帽をかぶった頭が人々の上に揃って出る。旅行が実に簡単になったと今更に感心された。
「パリに着くと午前中だったな。いつも混乱して時間にまごつくのだ」
「あ」
と、中松が知らせた。
「あすこに、おいでですよ」
中二階になっている食堂や酒場から降りて来る階段の途中に、人をさがすようにロビイを見おろしている洋装の女たちがいた。鼠色のスーツに、ブラウスの襟が深い緑なのが鷲尾妙子なのである。
「先に来て、あんなところにもぐり込んでいたのだ」
「ねむれるだけ、寝ておくんですな。なるべく話をしないことにしま

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

しょう」

空の旅に慣れた男で、鷲尾夫人にこう告げた。席も前と後に別れてあった。

銀座裏の「きよ田」で、寿司の屋根だけを肴に、二時間ほど粘ってチビチビ日本酒をやって来たのも飛行機に乗ってからすぐ睡る用意だったので、その上に丁寧なことは、機が舞立つなりスチュワデスに註文してコニャックを運んで来させ、それの肴にするわけでもなく常用の催眠剤を三粒ほど服用した。

それで、目が醒めて明るくなっていた窓から外を見ると、まだら雪を残した湿原のような大地が、ゆるやかに動いていた。アラスカ大陸に来ていた。他の国のように人の住む部落なり人家が見えて来ることがない。どこまでも無人の陸の起伏と白い色の海だけである。

夜のまま照明を暗くした機内で、後の席の鷲尾妙子を見ると、スカーフを巻いた頭を傾げて、ねむっている。

大輔は、もう睡れない。靴の音を忍んで通ったスチュワデスをつかまえて

「あと、アンカレジまでどのくらい？」

「三十分ほどして着きます」

また、小さいカーテンをおしあけて窓から下を覗くと、今度は電燈が点けてあるのが地上に見えた。道路だろうが、人里に近いことを示している。遠く山脈らしいものが見えるのに、あけがたの色がぼかした朱色に空に現れていた。黒かった地上に、森らしい鮮やかな青い色が点々としている。雪解の水らしい湖水か沼か金属のように光っている。五月と言うのに冷たい冬の景色であった。大輔の耳には歌舞伎の下座音楽や、つけの音がまだ残っているようだし、寿司をつまみながら、当分こんなうまいものともお別れだなと言ってから、まだ七、八時間しか経っていなかった。

二度目に振向くと、妙子が目を醒していた。かぶっていたスカーフを取りのけて、光線よけの眼鏡をかけているのが、肌の白さを、目立たせていた。ほほ笑むのが見えた。

「お早う。ねむれましたか」

首を振って、あまりよくねむれなかったと答えた。間もなくアンカレジに着陸するとアナウンスがあった。ぞろぞろと降りて見ると、空は明けていて地上がまだ暗い時間で、太陽はまだ出てない。

「朝食に行きましょう」

慣れている大輔が先に立ち、入国管理事務所で旅券にスタンプを押して貰って、寒々とした歩廊を粗末な売店や食堂のある一隅に案内した。

「顔を洗いたいところだが、狭い飛行機の中の方が設備がいい。トイレだって無料の奴にはドアが半分きりない。顔が見えていて先客があるのがまことに一目瞭然なのはいいが……ちょっと日本人のこまかい神経にはかないませんね」

売店には、白熊の絵葉書とエスキモーの生活を撮ったのが並んでいた。よその土地のような名所がないから、熊とエスキモーが代表なのである。

実用的だが、冷凍か乾燥させた卵だろうか、うまいとは言えない卵料理の一皿で朝の食事をしながら、向合って妙子を見ると、この建物にも部屋にもない洗練されたものが姿とからだ全体から感じられた。日本人には一応は適っても似合うことは難しい洋装にしても、このひとは自分のものにして、ちゃんと着こなして、不自然さを決して感じさせないばかりか、単純な形の中にエレガントな空気を霞のように人に感じさせる。

「これからが、ちょっと辛抱だな、北極の氷原ばかり数時間続く」

大輔は話した。

「雪と氷ばかりで……もっとも無関係に遠い下の方だけれど、たいくつは、たいくつですね」

「もう、ずっと昼間ばかりですか」

「さあ、それがわからない」

と、苦笑した。
「たしか、もう一度、夜が来て、それから明けて来て、ヨーロッパに入るのじゃなかったかしら。いつ通っても、記憶がはっきりしない。朦朧として、昼と夜とが、縞目のように重なり合っている」
「それは、きっと、先生がいつも、よくおよりになるからですよ」
薔薇色の微笑が妙子の顔にあらわれた。
「いや、ゆうべは珍らしく、よく睡りました」
「大変ないびき」
「え！」
おどろいて
「ほんとですか」
肩をふるわせたこまかい笑いがおさまると、真顔の涼しい目を向けて
「先生のいびきで、機体が割れて空中分解することを考えましたわ。おかしかったんです」
「こいつは、おどろいた。知りませんよ。すこしも」
「大丈夫よ。それほど大きくはなかったんです。ただ、私が寝られなかったせいで、ずっと伺ってたんです」
「妙なる音楽のようにね」
「えええええ、それは、雄大でした」
「荘厳とありたいな。ベートーヴェンの第五と行くか。運命が訪れて扉を叩くとね」
「パストラル（田園）でなかったことは確か。小川のせせらぎや、朝の小鳥の囀りは感じられなかったんです」
一時間後にふたりとも、また空に舞い上り砂糖菓子の肌を思わせて行けども際限のない氷原の上に自分たちの飛行機の影が小さく描かれて、いつまでもついて来るのを見おろしていた。
労働者の社宅らしい同じ型式の小さい家が数十戸、まるで玩具の町を見るように規律正しく並んでいるのを見おろしながら、ハンブルヒ航空場に降りる。氷と雪の曠野と、寒々とした色の冬の海が終って、ここではどの家の庭にも木芽立ち、杏らしい花が白く咲いているのが目にとまった。浅い春の景色であった。これがまた舞い立ってフランスの国土の空に入ると、雲の動く間からのぞく地上は緑で蔽われていた。優しくて美しい。その間を曲りくねって流れているセーヌ河らしい水のゆたかな川を見つけた。
「セーヌ河でしょうよ」
大輔は、妙子に知らせた。
「もう、間もなくパリです」
白い煙の塊を吹きつけたように雲の群がさかんに流れて通って、地上の眺めを隠くしたり、また見せたりした。緑樹の中に数多くの人家が現れた。パリに近いか、パリの一角に入ったらしい。オルリの空港に着くから、煙草をやめて、座席のバンドを締めてくれと、アナウンスされた。
「始めて見るパリには、きっと失望なさるでしょうよ。よほど、きれいな場所と大きく期待しているせいですね。ところがパリは、よごれているし、場末の町はごみごみして決して美しくない。世界中、どこの都会へ行っても同じことで、きれいにしてあるのは、どこか一部の地区だけで、下層の町へ行ったら、貧乏は世界共通で、きれいに見せるゆとりがないんです」
と、大輔は予告した。
「東京でも丸の内の官庁やオフィス街と、江戸川区や足立区の工場地区とは、ひどく違いましょう。東京の官庁街は、パリよりもきれいで立派ですよ。パリのは古ぼけているしどこにもある町の人家並に、目立たない。大統領の官邸でも教えられないと気がつかないくらい、普通のものですね。ところで、道路などは、パリは場末の貧民の町へ行っても立派に作ってある。緑の並木も植えてある。主な道路は、毎朝市役所から車で来て、水道の水で路面を洗い流して掃除するんです」

「……」
「埃がありませんよ」
オルリ空港では旅券の査証も税関の検査も、ないのと同じように簡単で、すぐ外に出られた。だが、大輔を迎えに出てくれる友人の姿が見つからなかった。
「おかしいな」
と荷物を床に置いて、きょろきょろして探した。ほかの日本人はいたが、電報を打たせた筈の友人が来ていなかった。
「自動車を持って迎えに来るように電報で頼んでおいたのですが」
弁解するように大輔は妙子に告げた。
「時間が少し変っても、飛行機のフライト・ナンバーを知らせておいたから、エール・フランスに電話で問合せてくれれば、着く時間はわかる。こいつは……私のとこの事務員が、まさか電報を打つのを忘れたのではないでしょうが、……おかしいな。もう少し待って見ましょう」
ガラス越しに見える外には、明るい光の中に、車体の色もさまざまの各種の自動車が玉虫か何かの昆虫の群のように、いっぱいに並んでいる。同じ旅客機から降りた外人がタクシイを呼んで、荷物をのせ、出て行くのが見えた。日本人のパリに赴任して来たらしい家族連れの一団も、音楽家らしいマッシュルーム・カットの青年も、出迎えの者に荷物を渡したり握手してうれしそうに立話ししていたのが、順に外に出て自動車で出て行くのである。
一人の日本人が側に来て、帽子を脱いで大輔に声をかけた。
「時実さんですか？」
見たことのない老人で、顔もむくみ色が悪く、剃刀も当ててなく、ただ人の好さそうな目を向けていた。
「そうです。時実ですが」
「折竹さんに言いつかってお迎えにまいりました」
そう言いながら、大輔の足もとに置いてあった鞄に手をかけて持ってくれようとして
「折竹さんが迎えに出るところでしたが、出がけに用事が起こって事務所へ行くことになったので、私に行けと言うのでした。この御婦人……はお連れですか」
「そうです。一緒です」
老人は、また帽子を脱いで妙子に向ってお辞儀した。
「よくいらっしゃいました」
男の顔の輪郭は、よく見ると鼻が高くて日本人として立派であったが、よほど貧しい生活をしているのか、服装をかまわぬのか、襟や上衣の肱はすり切れているし、ワイシャツの襟も洗濯が悪いのか皺だらけで、ネクタイも曲って結んである。立派な顔も、むくんでいるので病気の猫を見るようであった。ひとりで、妙子の分の荷物も持ってくれ
「どうぞ」
と、案内して、タクシイの乗場へ行った。
「お連れがあると聞いてなかったので、さっきから見ていながら時実さんとは気がつかなかったので」
と、二人をタクシイに乗せ、自分は運転手に手伝わせ荷物を積んでから助手台に乗って、言訳した。
「お待たせして失礼しました」
自動車が出ようとするところへ、人が来て窓から覗いた。黒い髪をきれいに撫でつけて、色の白い日本人の青年であった。スマートな服装である。
「ちょっと、お伺いしますが」
と奥に腰かけている妙子に問いかけた。
「鷲尾さんの奥さんでは御座いませんか」
「はい、そうですが」
「大使館の鷲尾書記官の代理でお迎えにまいりました。私は官補の浅倉です」

鷲尾妙子は、車を降りようとしなかった。優しいが、はきはきと答えた。
「せっかく、おいで頂いたのですが、こちらに御案内をお願いしてあるので、鷲尾にはホテルに着きましてから電話で話します」
「大使館の車を持って来てあるのですが」
「私、タクシイで結構なのです。荷物ものせてしまいましたし」
若い官補は当惑したような顔色を見せて
「でも、車もずっと大きいしお楽ですから、乗換えられては如何でしょう。わけないですよ。お手伝いします」
ふと、助手台に乗っている老人が気がついたし、老人の方でも子供のような官補に向って、頭をさげた。
「あ、塩沢君。君がお迎いに来ていたのか。降りて手伝ってくれ」
塩沢老人が、ドアをあけかけたので、妙子は急いで、とめた。
「おやめになって。このまま行ってくださいません？」
それから窓の外の青年にていねいに断った。
「失礼して、このままホテルへまいります。お連れの方もおいでですから……御免くださいまし」
肥ったフランス人の運転手が待ちあぐんでいたのに、妙子は、きれいな発音のフランス語で車を出してくれと命令した。
「失礼……」
うろたえたような顔付で見送る青年に会釈を残した。車は走り出した。青年がまた思い出したように追って来るのが見えた。
「ホテルは？　ホテルはどちらですか？」
妙子は自分の置かれた立場を苦笑した。どこのホテルへ行くのか知らないのであった。
「存じません」
塩沢氏が急に目をさましでもしたように、窓から顔を出して、ホテルの名を告げた。
「オテル・ロワイヤル」
ひろい空港の道に自動車は出ている。青い草の中に芥子の花が滴らした鮮血を見るように紅く咲いている。
初夏の風が匂っている。フランスに、パリに来たと、妙子はスカーフを巻いて髪のみだれるのを防ぎながら思った。水のような空気の流れを迎入れて窓をあけたままであった。
「奥さん」
と、助手台から塩沢氏が不精髭だらけの顔を向けて話しかけた。
「鷲尾書記官の奥さんでしたか」
「ええ、まあ、……」
と、見ように依っては不思議な返事になった。
「鷲尾で御座います」
「私は塩沢和市と申しますが、書記官にはよくお世話になっております」
妙子は、せっかくフランスに来たのを悦んだのに、と思った。夫の当世風で、見栄坊のくせに下僚の者に傲慢に見えるのに違いない態度を思い出した。外務省でも美男子として知られていたのを、当人がいつも意識して忘れることがないようであった。塩沢氏がどう言う関係で、鷲尾と結ばれているのか、まだ知らなかったが、この風采の上らない老人が好く待遇されているとは信じられなかった。
話を避けて、風に吹かれている。
「きれいですこと」
青い樹木や草が多い中に、遠く見える人家の壁の色や屋根の色が、何と言っても油画のものであった。自動車専用道路の左右は、日を受けた田園や郊外らしい人家の聚落である。さかんに、芥子の花の色が見える。
「芥子でしょう、あの花？」
塩沢氏がこの問いに答えた。
「そう……コックリコの花です」
妙子は明るい笑顔をひらいた。

「コックリコ？」
「ええ、コックリコの花です」
そのあとで塩沢氏は、言足した。
「そうでしたね。日本では芥子でしたね。コックリコと言いなれているので、日本語で何と言ったか思い出せなくなっていました。奥さんが、芥子と言われたので、久振りで芥子ってことを思い出しました」
「永いんですか、こちらは？」
と、大輔が言葉をかけると、塩沢氏は、風采にふさわしくなく、ゆっくりとした返事をした。
「そうです。四十年近くですか……算えても見ない」
「その間、時々、日本へ帰られて」
「いえ、一度もです。こっちに根が生えてしまったんです」
「四十年……戦争中もですか」
「そうです。戦争中もです。誰もいなくなったから、大使館の留守番に入っていました」
「コックリコ」
花の名を面白がって、妙子が言った。
「花が居睡りしていそうな名前」
時実大輔は、妙子が別れようとする夫に旅客機の到着時間を知らせたとは信じられない。外交官のことだから本省と連絡もあり、何かの方法で妙子がいつの飛行機に乗るか知ったものだろう。それにしても自分は空港に迎えに出なかったとしても部下を寄越した。妙子がこちらの自動車に乗った後になったので、良人が示そうとした好意が無駄になった。と言うよりも妙子が良人から迎えと知っていて斥けたような形となった。
弁護士は、物にこだわらぬ明朗な気性から
「いいだろう」
と思った。
「こいつは、いよいよ戦闘開始だ。西洋風の決闘で言えば手袋を叩きつけたことになる」
自動車はオルレアン門附近の、場末らしい町並の中に入った。停止信号で停って待っていると、バスを待っているフランス人の列が目にとまった。すりこぎのような形をした細長いパンを小脇に挾んで、歩道を紳士が歩いている。肥った女が足の短かい犬を連れて通る。
塩沢老人が案内してくれたホテルは、モンパルナッス駅の近くにあって、並木道の美しい通りに入ったかと思うと、その道筋の樹木の間に車を入れさせて停めた。
「あいにくとどこも混んでいて、こんな小さいホテルしか予約できなかったのです」
と、塩沢氏は言いわけするように言った。彼は、空港で始めて鷲尾夫人を見て、こんな安宿の客でないのに気がつき、すこし困っていたのであった。大使館の鷲尾氏の夫人だと知ってから、当惑は焦慮に近いものに成った。
「折竹さんと御相談して、すぐに他のもっとよいホテルにあいた部屋をさがしますから」
ホテルの表面を背の高いプラタナスの緑の枝の間に見上げた妙子は
「可愛らしいホテルじゃありませんか。結構ですわ」
「パリはこれから夏のヴァカンスに入るわけですが、北欧やアメリカからのツーリストで、どこも一杯に混んでいるので」
塩沢老人はさっきからひそかに心配になっていることを言い出した。
「でもマダムは、大使館の方へいらっしゃるのではありませんか、私は何もうかがっていなかったのですが。鷲尾書記官はパッシイのレジダンス（高級アパート）に部屋を持っておいでですから。私は折竹さんに頼まれて、オルリにお迎えに上っただけなのでして。時実先生のお連れがマダムだとは存じなかったので」
「いいんですわ。私、ここに泊ります」
ホテルの受付では、老嬢か未亡人らしい痩せて意地の悪そうな顔をした女が、事務的に旅券を預かりカードに書き入れさせてから、部屋

の鍵を渡した。東洋人の妙子の風姿に眼鏡越しの視線を無遠慮に向けて見まもった。

体格の大きい女中が出て来て、手荷物を提げ、案内に立ってくれた。エレベエターは四人乗ったら身動きも出来ないくらい一杯になる上に、鉄のわくだけなので、その外を巻くようにして徒歩用の階段が登っているのが見えていた。

部屋は三階で、表通りを見おろし、並木の高い枝が窓から手がとどきそうに見えた。浴室附だが、バスタッブも旧式で、短かい脚がついて土間に据えたもの、部屋の寝台も服箪笥も実用的なだけの、粗末なものである。

時実弁護士の部屋は隣りであった。そちらへ附いて入っていた塩沢が、まだ開けはなしてあるドアをノックして妙子の返事を聞いてから入って来た。

「如何ですか？　どうも、思ったよりよくないですな」

恐縮した様子で

「一晩だけここで御辛抱願って、御入用なら他にさがしますから、お移り願うんですな」

「結構よ。こちらで」

妙子は別に我慢して言ったのではなく、素直な様子であった。

「学生時代に戻ったようで、格式ばった大きいホテルよりも気楽でいいんですわ。時実先生は、どう仰有っていて」

「客が来た時、拙いなと仰有ってでした。ごもっともなんです」

塩沢が妙子ひとりの部屋に入って来たのは他の話題があったのだ。

「奥さん」

窓わくに手をついて下の往来を眺めていた妙子が振向くと

「鷲尾書記官にお電話なさいますか」

「ええ、顔でも洗ってから」

と、普通に答えてから、自分がおかしがって微笑して

「電話で顔が見えるからと言うんでないのです。ゆっくりでいいんですわ」

「それなんですが、マダムにお願いがあるのです。後ほど書記官にお会いになった時に、塩沢は奥さんをお迎えにオルリに行ったのでなく、時実先生のお迎えに出たら、奥さんがごいっしょにおいでだったので……時実先生の車におのせしたのだと、おことわり願いたいのですが」

「どう、おっしゃるの？」

「大使館から官補の方が車を持ってお迎えに出たのに手前が余計なことをしたとお取りになると、塩沢は叱られるのです」

叱られる、という言葉が、塩沢のように老けていても顔の輪郭にも偉丈夫の面影がある大男の口から出たのは、多少自分を滑稽に見せるくわだてが入っていたのだろうが、妙子は光線のせいではなく顔色がくもった。

叱ると言うのが、下僚に向ける尊大な態度から時々見せる、意地悪く、かっとなる鷲尾良光の性質に確かにあった。呼び出して人前だろうが構わず叱りつけるのである。結婚して間もなく、インドのカルカッタに赴任した良人に附いて行った。アンタッチャブルなどの賤民から始めて人間の身分階級が実に差別のある東洋風な社会で、いやしめるのが相手の人間を認めることになるのかと思うくらいに乞食や奴隷に近い存在の多い都市だったが、良光のは狭い日本人の社会の中で、官僚らしく高飛車に人を極めつけるので、見ていて居たたまらぬ思いで、逃げ出したくなるのだった。

上役の者に向けては、そんな態度に出たことがなく、むしろ羊のようにおとなしいのも、妙子は気が咎めた。良光の目の敵にするのは、在住の商社の者や、民間の日本人旅行者に対して人間の別の種族を見るように、口のきき方まで故意に傲慢らしい出方をする。評判はもとより悪いのだが、為替関係や手続上のいろいろの許可を支配されているので、陰口に出ても面と向っては、おだてたり御無理ごもっともで機嫌を取る人々ばかりであった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com